

今月の題字
須永舜(しゅん)くん

(みどり市大間々町)

4月から小学校1年生。甘えん坊でちいかわのハチワレやトミカが大好き。剣道一家の後継者として、将来は剣道の指導者になっているかも。



虹の架橋

検索で、インターネットからでもご覧いただけます。

長澤薬師『目の字奉納』

「三方よし」の会では、大間々四丁目のまま通り(木戸商店隣)で、毎年恒例の長澤薬師『目の字奉納』を開催いたします。
長澤薬師は、四百三十年ほど前に大間々町を開いた「草分け六人衆」の一人である長澤家が代々守り続けてきた薬師様で『目』の字を九つ書いて奉納すると眼病が快癒するという言い伝えが今でも残っています。



「三方よし」の会では、地域の伝統行事でもある「目の字奉納」を次の世代に伝えるために、光栄寺ご住職様にお願ひして、目の字奉納の祈願者の名前を読み上げてもらい、眼病治癒と健康祈願を行います。
当日は先着100名様に近藤酒造様提供の酒粕でつくった甘酒をご用意いたします。
長澤薬師目の字奉納の復活を記念して2015年に植樹した紅しだれ桜がちょうど見頃を迎えている時期かもしれません。



昨年の目の字奉納

長澤薬師「目の字奉納」
4月5日(日)9時~10時
まま通り木戸商店隣りで甘酒も用意しています。



小耳にはさんだ
いい話
(文責・菊)
《368》

日本人は、神話や伝説や地域の民話などを語り継ぐことで、勤勉さや誠実な生き方を身につけてきました。しかし、道徳教育が疎かになり、戦前の教育が全否定されたことで童謡や唱歌が歌われなくなり、地域に根づいた民話もいつの間にか忘れ去られ、語られなくなりました。民話を後世に伝えるために尽力した人たちがいてくれたお陰で大間々や桐生や黒保根の民話がたくさん残されています。

大間々町の民話

生前、ご縁をいただいたいた桐生の清水義男さんから『大間々町の民話』という三冊の本をもらいました。清水さんが採録した七十二編の民話の中に『天海大僧正の腰掛け岩』という話があります。

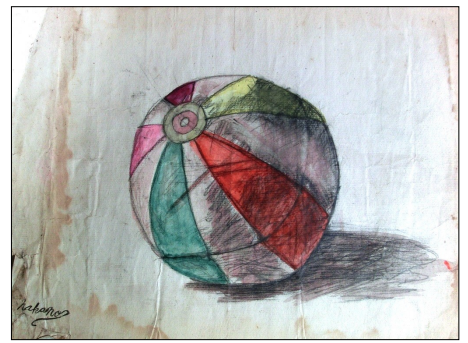
日暮れの小道(現在の銅街道)をみすぼらしい姿の坊さんが疲労困憊の様子で歩いていました。坊さんが道端の手頃な岩に腰を下ろして周囲を見回すと、覚成寺という寺の屋根が見えた。坊さんはその寺へ行き、住職に「私は旅の僧だが一晩泊めてもらえないか」と頼むと、住職は坊さんを温かく迎え入れ、手厚くもてなした。翌朝、坊

世界一小さな
定利屋
トイレ美術館

今月の絵《368》

中野ちよ『紙ふうせん』

中野ちよは、107年前に前橋市の老舗和菓子屋「松屋」の長女として生まれ、前橋高等学校(現・前橋女子高校)の13歳の年にこの絵を描き、23歳で大間々足利屋の松崎福司と結婚して松崎ちよとなりましたが33歳の厄年に私(松崎靖)を産んで3時間後に亡くなりました。中野ちよとして生きた23年と松崎ちよとして生きた10年を想像しながら紙ふうせんの絵を見ていると、人生の夢や希望や儚(はかな)さを感じます。母ちよは4月14日に生まれ、73年前の4月5日に亡くなりました。4月は出会いと別れを感じる季節です。



靖ちゃん日記

令和8年3月15日(日)
百年後まで語り継ぎたい地域の歴史を落語風にした「みどり市創生落語」と、ながめ余興場で開催した。「うさぎとかめ」や「金太郎」の童謡と作詞した東村の石屋和三郎物語を三遊亭楽麻呂さんが語り、三遊亭萬橘さんは、明治の大間々の大火災を醤油で消した話に、男達が自分のホースを出し、女達が尻をまくってオナラで吹き消そうとする姿を盛込んで笑いを誘った。七代目岡楽さんは、水の乏しかった笠懸村に用水をつくった岡上景能物語を語った。
終わった後、出演者3人と黒子の会の仲間川人が「打ち上げ」で盛り上げた。
岡楽さんには七代目襲名興行の時「虹の架橋」の題字を書いてもうけた。20年前にはお父さんの三遊亭好美さんにも書いてもらった。岡楽さんの横にいた萬橘さんが「ホクはまだ書いてない」と言った。下ネタ好きの萬橘さんに頼むと、題字の中に男の尻や女のオナラの絵を描きそうぞ心配。でも頼んでみない。

さんは、「旅の僧などと身分を偽ったが、拙僧は初代將軍の徳川家康公の分骨を日光東照宮へ届ける途中の天海と申す者です。昨夜来の温かいおもてなしに心から感謝申し上げます」とお礼を述べた。住職は驚き「あなた様が天下に名高い天海大僧正さまでしたか。大僧正さまをご接待できましたのは拙僧一家の誇りになります」と喜んだ。「いやいや、拙僧こそ、このよな心あるお寺に厄介になれて良き思い出ができました。これはお世話になったお礼です」と言って、家康公が守り本尊としていた北

辰妙見大菩薩像と独鈷を覚成寺へ残し、力強い足取りで日光東照宮に向った。
後世になって天海大僧正が腰かけたとされる岩は覚成寺の山門近くに移され、妙見大菩薩像と共に寺宝として今に伝えられている。

吹く風は悲喜こももにも桜舞う
今年も桜の季節を迎えました。春の訪れを運ぶ「春一番」や、花の蕾を膨らませてくれる「あめ東風(ごち)」、心を和ませてくれる「和風」、花を散らせる「春嵐」など、風を表す言葉は、折々の桜と悲喜こももにも関わり合っています。
「桜前線」は、一カ月半かけて日本列島を縦断しながら各地で明るい話題を提供しています。「散る桜残る桜も散る桜」と詠んだ良寛さんの時代も今も、皆が桜の話題を楽しんでいます。